

日本社会心理学会会報

193号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2012年3月21日

東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか / 何ができるのか：この1年を振り返る

安藤清志会長

私たち第26期役員が活動を始めてからほぼ一年が過ぎました。この一年は、東日本大震災からの復興の道のりとほぼ重なります。この間、大学やその他の組織が行うボランティア活動、あるいは義援金という形で復興支援に協力した会員の方々も多かったのではないかと思います。ご存じのように、本学会も広報委員会が中心になって、「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言と情報」というサイトを立ち上げましたが、今後、こうした活動をどのように継続していくかが課題になります。現在、このサイトのあり方も含めて、学会として広く社会に発信する情報の内容と提供方法を検討する特別委員会の設置を検討しています。内容の信頼性を確保しながら、必要とする人々に理解しやすい形で情報を伝えるにはどのようにしたらよいのか、知恵を絞りたいと思います。

私個人としましては、昨年から日本心理学会の「東日本大震災復興支援委員会」の委員として、研究・実践活動を行うグループへの助成を行う作業のお手伝いをさせていただきました。日本心理学会では、これとは別に「東日本大震災関連ページ」というサイトを立ち上げて情報交換の場として活用してもらおうという形の支援を行っています。1年前の会報に寄せました一文は「もっと社会へ」をタイトルとさせていただきましたが、日中で仕事をした経験から、「もっと社会へ」への道筋として2つのルートを活用する必要があるようになるようになりました。第1のルートは、言うまでもなく社会心理学会として直接社会に向けて発信することです。第2のルートは、公益社団法人となった日本心理学会を通して発信するやり方です。本学会の会員の半数以上は日本心理学会の会員でもあります。前述の東日本大震災復興支援委員会の委員の半数は本学会の会員です。『心理学研究』や『心理学ワールド』の編集委員会でも本学会の会員が多数活躍しています。2つのルートで独自に発信することは学会の「アイデンティティ」に関わる活動として重要かもしれませんが、受け手の側から見れば、有用な情報が得られるのであれば、どちらの学会からでも構わない、ということもあります。情報提供にあたって2つのルートをミックスしたり融通しあったりするなど、工夫の余地があるのではないかと思います。こうした工夫を重ねることは、ボランティアとして時間を割いてくださっている多くの会員の活動をさらに有意義なものにするのではないのでしょうか。この意味で、「もっと社会へ」とともに、「もっと心理学ワールドへ」目を向けたいと思います。

さて、「もっと社会へ」とは言っても、その大前提として、提供する中身を充実させることが不可欠です。研究活動を活性化し豊かな知識を生み出してこそ、社会貢献が可能になります。今年度は、6月には大分で公開シンポジウムを、11月には筑波大学で年次大会が開催されます。さらに、来年は沖縄で、再来年は「北の大地」での大会開催が予定されています。研究・教育はもとより大学運営に関わる仕事などでお忙しい中、こうした学会活動をボランティアで支えてくださる先生方には、本当に感謝の念に堪えません。今後とも、研究活動をさらに活発にさせるためにも、多くの会員の方々が積極的に、災害ボランティアと同じくらい価値のある「アカデミック」ボランティアの輪に加わってくださることを期待しています。

(あんどうきよし・東洋大学)

東日本大震災を経験した社会心理学者の1人として

伊藤哲司

2011年3月11日午後2時46分、私は、茨城大学水戸キャンパスのある校舎の4階の教室にいた。翌日は国立大学の後期日程の入学試験であったため、ひとつひとつの机に受験番号票を貼っている最中だった。突然やってきたのが、あの恐ろしく激しい揺れ。しかもなかなかその揺れがおさまら

ない。その尋常ではない揺れに思わず机にしがみついてしゃがみ込み、天井からつるされたテレビが徐々に向きを変え、まだテープで留めてなかった受験番号票が舞うように机から落ちるのを眺めていた。窓の外では、隣の校舎の屋根の避雷針が、まるで釣り竿の先のように揺れていた。1ヶ月ほど前のニュージーランド・クライストチャーチでの地震によるビル崩壊のことがふと思い出され、この古い校舎ももしかしたら……と悪い予感が頭をよぎった。

● 今号の主な内容

- 【1面】 東日本大震災に際して社会心理学者に何ができたのか/できるのか
- 【4面】 2011年度若手研究者奨励賞
- 【4面】 編集担当常任理事より
- 【4面】 若手会員、声をあげる
杉浦仁美 橋本博文
- 【6面】 社会心理学を支えていただいている方々 その3
- 【8面】 新入会者名簿など

その後のことは、思い出そうとすれば今でもけっこう思い出せる。直後に「明日の入試は中止」という判断が出て驚いたこと、自分の研究室に行ってみたら本やら資料やらがほぼすべて床に落ちて散乱していたこと、自転車で家に戻ると中学卒業したばかりの娘が家から出てきて「お父さん、家の中のものすべて落っこっちゃったよ」と笑っていたこと、電気と水がストップし非常用の水でインスタントラーメンを作って子どもたちと夕食にしたこと、電灯の消えた町の夜空がゾクッとするほどきれいだったこと、子ども用の2段ベッドで小学校4年生の息子と身を寄せあってラジオを付けっぱなしにして眠りに就いたこと……。

翌日の午後になって電気が回復し、初めてテレビのニュース映像を見て、もっと凄まじいことが東北地方沿岸部で起こっているらしいことがようやく徐々にわかってきた。テレビから断続的に流れてくる「ポポポーン」のCMがやたらと耳につき、しばらくは動かたくとも思うように動けなかった。私自身も、いつもとは違うモードに入ってしまったのだろう。今にして思えば、某かの心理的なダメージを私自身も受けていたのではないかと思う。

大学からは自宅待機をするよう言われ、2日後から予定していた大学企画の「ベトナム学生交流の旅」も中止を余儀なくされ、得も言われぬ時間をしばらく過ごした。日本各地だけでなく、ベトナム・インドネシア・タイ・韓国・中国にいる友人たちからも、安否を尋ねるメールを受け取り、そのひとつひとつに「こちらはとりあえず大丈夫」と返事を書いた。数日間は、食料を買うのにスーパーに長蛇の列ができ、ガソリンもなかなか買えなかった。原発事故が緊迫度を増すにつれ、慌てた留学生たちからは不安げな声の電話がいくつも入り、なかには「先生も一緒に中国に行きましょう。先生の住む場所もあると両親が言っています！」と真剣に言ってくれたゼミ生もいた。原発事故のことはもちろん気になったし、今でも気になり続けているが、私自身は茨城を動く気にはならなかった。むしろそこに留まって、今この社会で何が起きつつあるのかを見届けたいという気持ちのほうが強かった。

ところで私は、「社会心理学」は、心理学の一分野に留まらない広がりがあると考え

ている。『社会』についての心理学という捉え方があるのは当然かもしれないが、そうではない『社会心理』の学だというわけである。となると「社会心理」とは何かということがすぐに問題になるが、さしあたり「個人」たちが作りだし担っている「社会」との相互作用とでも、やや大ざっぱに過ぎるかもしれない言っておこう。「社会」を御神輿、「個人」を御神輿の担ぎ手だと比喩的にイメージしてみるとわかりやすいかもしれない。ワッショイワッショイとやっている人々（個人）は御神輿（社会）を担ぎ、その御神輿（社会）は人々（個人）の揺れ方に影響力を及ぼしてくる。そのような「社会心理」を常に紡ぎだしているという点で、私たちは社会的動物なのであって、誰しもそこから完全に外れるということとはできない。

東日本大震災という未曾有の災害には、天災という側面だけでなく、人災という側面が確実にある。そしてそれらは、この「社会心理」のあり方にも影響を与えないわけではない。あの日を境に、やはり何かが変わった。茨城大学ではすぐに震災調査団が構成され、主に理系の同僚たちがすぐに沿岸部などの調査に出た。彼らの動きは早い。私自身も4月以降は徐々に「被災地」と呼ばれることになった地に足を運ぶようになり、人々の声にも耳を傾けるようになったのだが、そこで必ずしも系統だってインタビュー調査をするわけでもなく、むしろその渦中のなかでどんな社会心理の揺れが起こっているのかを、この身でゆっくり感じたいと思った。

4月下旬に初めて、自分の車で気仙沼に入り、一見何事もなかったかのような駅前付近から港のほうに入っていくと、夕刻の薄暗いなかで、あるところを境に風景が一変した。あの衝撃は今でも忘れられない。その境界は、津波が到達したところを示していた。信号が止まった道路を走り港まで出てみると、大きな漁船が打ち上げられ、あちこちが無残にも破壊され尽くされていた。少なくとも2011年3月11日午後3時45分までは、ここもいつもの港町の日常風景が続いていたに違いない。地盤沈下して浸水したままの道路や、焼けただれて積み上げられた車。月並みな言い方しかできないのだが、あのときから時が止まっているかのようだった。

さて、この東日本大震災を受けて社会心理学を学ぶ者として何ができるのか——その答は簡単には出せそうにもない。いわゆる「心のケア」をするわけでもない。しかし現場に佇み、その現場に刻み込まれた地理や歴史に思いを馳せ、生き残った人々の傍らにいて、様々な分野の人々とも繋がりつつ、今ここで起こっている社会心理のありようを見つめつつ、何ができるのかを考えてみたい。それをほんの一時で終わらせてしまうことなく、これからまだ長い時間をかけてその営みを続けていきたい。この3.11を直に体験した社会心理学者の1人として、それはいわば使命のようなものかもしれないと思っている。

震災の傷跡が生々しいフィールドを映し出したドキュメンタリー映画「無常素描」(大宮浩一監督)に登場する医師の長尾和宏さんは、「共に震える医者でありたい」と書いている。同映画に登場する僧侶で作家の玄侑宗久さんも、「また(地震や津波が)きたらどうしようと怯えを残す。私たちは怯えていてもいいんじゃないか」と、映画のなかで話していた。私自身は、震災後に使い始めたFacebookを活用して、津波被災をした水戸の隣町である大洗の人々と「大洗応援隊!」というグループを学生らと立ち上げ、対話の場などを作ってきた。また、北茨城で被災した住民グループ「あすなる会」とも関わりを持ちつつある。それらに留まらず、「社会心理」の学の地平から感性を研ぎ澄まして、ときにフィールドに入り込み、ときにそこを俯瞰して、震え怯えもしつつ「何ができるか」を長い時間をかけて模索し続けていきたいと考えている。

2012年3月11日 東日本大震災のちょうど1周年の日に
(いとうてつじ・茨城大学)

東日本大震災の地から

吉田綾乃

はじめに、震災直後より多くの皆さまからご心配やお見舞いの言葉を頂きましたことを御礼申し上げます。昨年3月11日に発生した大震災から1年が経とうとしています。「被災地」にいた社会心理学者としてコメントを、というお話は早くから頂いていたのですが、この間、筆をとることに躊躇しておりました。その訳は、私自身、仙台

市内の大学に勤務し、震災後1ヶ月におよぶ不便な生活を強いられたものの、自分が「被災者」であるとは認識しておらず、実際に壮絶な体験をし、大切な人やものを失い、現在でも困難な生活を送っている人々が多くいらっしゃるなかで、「何を」「どのように」語ればよいのかが、分からなかったためです。そして、何よりも、私はこの1年間「社会心理学者」としての社会的責務を果たしたとは言えないという思いがあるからです。

振り返ってみると、この1年間は、この状況のなかでひとりの人間として、どのように振る舞うべきかを問われ続けていたように思います。避難所からの電話で「何も無いのです」と叫んだ学生、自宅は流されたが家族は無事だと明るく伝えてくれた学生、友人が未だに行方不明であると話した学生、被曝のため避難していると連絡をくれた学生、福島から家族がアパートに避難してきている学生、ボランティアに行き無力感を抱いて戻ってくる学生、等々、彼らに対してどのような対応をすべきだったのか今でも答えは出ません。

私が大学生の時に阪神大震災が起きました。映像を見て大きなショックを受けたことを憶えています。それは、自分の故郷が被災することの衝撃とは比較にならないことを、改めて痛感しました。何度も訪れ、見知った場所が変わり果てた姿になること、それは現実感が無く、とても受け入れ難いものでした。「受け入れ難い」というよりも、その現状や、現状を見た自分自身の心理状態を適切に表現する「言葉」が見つからないのです。家の土台だけがその場に残り、瓦礫の中に手作りの木の十字架が立っている、それが市街から、ほんの10分程の場所にあるのです。

私は震災の後に『悲しみに言葉を』(ジョン・H・ハーヴェイ著 安藤清志監訳 誠信書房)を読みました。多くの人々が、未だ「言葉」を探している状態にあると思います。被災した人たちは今、自分が「語ることができること」だけを語っているのであり、それが全てではないこと、それは時とともに変化するという心をとめて、人々と接していかなければならないと思っています。また、自分自身が震災後に「言葉が見つからない」という経験をしたことから、心理学の実験や調査と称して多くの

人々に「あなたの今の気持ちについてお答えください」と聞き続けてきたことが、ある意味ではとても傲慢な行為だったのではないかと、とも気づかされました。震災に関わる心理的な現象やプロセスについて、「結果の一般化可能性」を論じることの重要性を、理解はできるのですが、感情的には、受け入れることが難しいと感じました。ただ、それでもなお、社会心理学の知見は、他者と協力しながら新たなコミュニティを形成し精神的な健康を取り戻す、すなわち「日常」を取り戻すために、有効であると信じております。そして、今後も、大震災の結果、未だ困難に直面している多くの被災者に対する、会員各位のそれぞれのお立場での長期的なサポートをどうぞよろしくお願い申し上げます。

(よしだあやの・東北福祉大学)

震災から思うこと

川嶋伸佳

最初の揺れを感じたとき、私は研究棟の1階でミーティングをしていました。揺れはどんどん激しくなり、身の危険を感じた私たちは、部屋の入口、廊下、玄関へと移動しました。「建物の外に飛び出すとかえって危険だ」とどこかで聞いたことがありましたが、つかまっていた柱が割れ始めたのに気付いたときはもうそんなことを言っていられなくなり、必死で外に飛び出しました(後日確認すると、実際は柱の表面の塗装にひびが入っただけだったのですが…)。

自宅は足の踏み場もないほどものが散乱し、停電で片づけができる状態ではなかったため、その日は比較的被害の少なかった知人の家にお世話になりました。薄暗くて寒い部屋の中で、ラジオは繰り返し被害状況を伝えていましたが、そのときの私にとって、それらはなぜかあまり現実味のないものでした。私が自分の置かれた状況を理解したのは、震災翌日の夜、自宅に電気が戻り、ほっとしてテレビをつけたときでした。自宅からわずか十数キロしか離れていない街が津波にのみこまれる映像を目の当たりにして、今回の震災のすさまじさを知ると同時に、自分はなんと運が良かったのだらうと感じました。私の被害といえば、電子レンジが壊れたことくらいでした。

あの震災から1年が経ちます。始動が例年よりも約1か月遅れた研究室は、前期こそ相当バタバタとしたものの、後期はほぼ通常のスケジュールに戻り、少なくとも目に見える範囲では、震災の被害はあまり残っていないように思います。むしろ、先日行われた追いコンでは卒業生の間に強い結束を感じましたが、震災後の研究室に貴重な食料を持ち寄り、苦労を共にした経験が、メンバー同士の絆を深めるのに一役買ったのかもしれない。

この文章を書く機会をいただいて、私個人や研究室としての被害は幸いにも少なかったのだと改めて感じます。しかし、いうまでもなく、震災の爪痕はいまだ多くの人を苦しめています。一日も早い復興を願うほかありません。

(かわしまのぶよし・東北大学)

決定!

2011年度若手研究者奨励賞

学会活動担当常任理事 遠藤由美

今年度も、若手研究者奨励賞に多数のご応募をいただいた。昨年11月30日までに寄せられた40件の応募について厳正な審査をおこなった結果、次の5名の方への授賞が決定した(50音順)。

後藤崇志(京都大学大学院教育学研究科修士課程2年)「自己制御における認知制御と感情・動機の関連性」

杉浦仁美(広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期2年)「集団内、集団間地位による外集団攻撃過程の検討—社会的支配志向性の観点から—」

高浦佑介(東京大学大学院人文社会系研究科修士課程2年)「社会関係資本が環境配慮行動に及ぼす効果の検討—マルチレベル分析の視点から—」

長谷川由加子(上智大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程1年)「情動の社会的共有が持つ真の機能の検討—集団内成員の評判を普及させるのか—」

李 楊(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程1年)「日本社会と中国社会における信頼形成プロセスの差と、社会関係の拡張性に関する研究」

〈講評〉 選考委員による入念な審査と意見交換をおこなった結果、研究の意義、実行

可能性、将来性などについて、全委員から安定した高い評価を得た5件が授賞対象として選出された。優れた研究計画でありながら僅差で選に漏れた応募も相当数に登った。惜しくも受賞を逃した応募者は、ぜひ来年も再び挑戦していただきたい、そしてまた、今年は応募を控えた人は来年こそ是非チャレンジしてほしい、というのが選考委員一同の願いである。

応募の中には、最先端の研究動向をいち早く取り入れ新しい切り口で問題に迫ろうとしたものがあり注目を集めたが、古くからの研究テーマであってもじっくり先行研究を読み込んで重要な1歩を付け加えようとした着実な研究にも、相応の評価が与えられた。その一方で、研究の意義を効果的説得的にアピールするための工夫が足りないものや、研究計画が極めて抽象的にしか記述されていないものなど、あと1歩の精進が求められるようなケースも見受けられた。研鑽を積んだ若手研究者らしいのびやかさと質実さをあわせもった応募が次年度以降も数多く寄せられることを期待したい。

選考は角山剛(東京未来大学)、斎藤和志(愛知淑徳大学)、辻竜平(信州大学)、石井敬子(神戸大学)の各先生にご担当いただき(敬称略)、それに遠藤が加わり、計5名で進めた。各先生には年末年度末の繁忙期にもかかわらず、たいへん丁寧な審査をしていただいた。この場をお借りして皆さまにお知らせするとともに、心から御礼申し上げます。

(えんどうゆみ・関西大学)

編集担当常任理事より

編集担当常任理事 唐沢 穰

編集担当の任を務めさせていただいて早くも1年目が終わろうとしています。論文投稿をはじめ積極的に関わってくださった会員の皆さま、編集委員および関連委員の皆さまのご助力に、心より感謝いたします。着任直後のごあいさつ(会報 No. 190)に述べましたとおり、編集委員の任は本当に大変だという思いを、この1年間でさらに強くいたしました。委員長からの依頼を受けて主査を担当されると、審査者(副査)の選定に始まって、審査が公正かつ遅滞ないよう進められるよう常に重い精神的負担を担っていただくこととなります。審査自体に投入される時間や労力も、並大抵ではありません。論文中に引用された文献に当たったり、評価と助言の趣旨が投稿者にうまく伝わるように審査結果を書くなどの作業は、思った以上に負担を強いられます。審査者(副査)の先生方にも、同様の負担を負っていただいていることは間違いありません。異なる主査から、1年間に何度も審査を依頼される先生も珍しくありません。審査者の皆さまのお名前は毎年度、第3号の巻末に掲載されますが、「現在進行中」の審査で奮闘していただいている先生たちや、採択されなかった論文を担当された方々のお名前は表に出ることがありません。このように、有形無形の犠牲的な働きによって、会員の貴重な研究成果が論文として世に送

り出されていることに対して、改めてお礼を申し上げます。

学会誌の審査・編集に加えてもう一つ、学会賞の選考も私の担当でしたが、この任にあたっていただいた皆さんにも大変お世話になりました。学会誌の審査に加えて選考に当たってくださった「編集委員から選出」の皆さん、そして編集委員でもないのにいきなり私に依頼された「会員から選出」の委員の皆さん、ご自分の研究活動などでお忙しい夏の時期に、本当にありがとうございます。

そして最後になりましたが、編集幹事として私を助けてくれた竹橋洋毅氏にも、心からお礼をいたします。彼の仕事こそ、表に現れない地味な作業の連続でしたが、常に注意深くまた効率よく任務を果たしてもらいました。4月には新しい職に異動されるため(おめでとうございます!)、代わって名古屋大学大学院環境学研究所・博士後期課程在学の後藤伸彦氏に、その任を引き継いでもらうことになりました。すでに常任理事会での承認を得ていることを皆様にお伝えいたします。

学会誌の発行も学会賞の授与も、すべて会員の皆さまのご研究の活発さによって支えられて成り立っています。今後とも、ますますのご協力をお願いいたします。

(からさわみのる・名古屋大学)

若手会員、声をあげる

「広島社会心理研究会(HSP)のお誘い」
杉浦仁美

この度、広島にて発足される研究会の紹介と告知を投稿させていただくことになりました、広島大学大学院の杉浦仁美と申します。このような場で告知する機会を与えていただけたことを大変ありがたく感じています。

本研究会は、「西日本を中心とした若手心理学者が情報交換・議論できる場を作ろう」という目的の下に企画されました。赴任直後、またたく間に大学に馴染み、馴染みす

ぎたが故に最近ボケをクールな女子学生達にスルーされまくっている清水裕士先生が、「せっかく広島や九州近辺に精力的な若手研究者がたくさんいることだし、なんか研究会したいね」とおっしゃったのが約3ヶ月前(2月現在)。その提案はいつものボケのように流されることなく、無事、賛同者が募り、今年3月10日に広島大学にて九州大学大学院の縄田健悟先生をお招きし、第1回が開催される運びとなりました。また、引き続き4月頃には、名古屋大学大学院の浅野良輔先生をお招きして第2回を開催す

る予定となっています。私もいつの間にか巻き込まれ、こうして運営係としてこの記事を書いている次第です。

本研究会は、「学内のゼミだけではなく、他の研究者と議論したい。でも関西や関東で行われる研究会は少し遠くて参加することができない!」、こうしたお悩みを持つ若手研究者の皆さんと一緒に、忌憚のない意見交換をすることができる場を作ることを目指しています。特に、この研究会ではなるべく“議論”の場を大事にしていく方針です。プレゼンや議論をする力は、なか

なか一人で身につけることができるものはありません。私自身、学会で雰囲気になんか飲まれてしまい、自分の考えを相手にちゃんと伝えることが出来なかったと力不足を痛感して落ち込むこともしばしばあります。こうした若手の「議論をする力」を養うためにも、発表者の方には“話題提供”の気持ちで研究紹介をしていただき、参加者同士が意見や質問を積極的に言い合える場になればと思っています。また、諸先輩の方々には若手をビシバシと鍛えていただければと思います（こんなことを書いて後悔しないか若干心配です）。

こうした発足の経緯と目的がありますので、発表者・参加者ともに制限を設けず、社会心理学の分野であればどなたでも自由に参加できる形にしたいと思います。どこかで公表したいと思っているデータがもしお手元にありましたら、どんなデータでもかまいませんので、ぜひ気軽に発表していただけると幸いです。また、現在の時点では、広島大学の関係者以外の方々からも多くの参加希望のお言葉をいただいています。どなたでも興味があれば参加できるようなオープンな会にしたいと考えていますので、ぜひ広島まで足を運んでいただけたらと思います。

本研究会は、社心学会メールニュースをはじめとする各種メールリリスト等を通して告知していく予定です。この会に興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、運営係の杉浦 (e-mail: sugiura-h@hiroshima-u.ac.jp)、もしくは代表者の清水 (simizu706@hiroshima-u.ac.jp) まで気軽にご連絡ください。広島大学の所在地であるここ西条にて、名産品の日本酒と共に多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(すぎうらひとみ・広島大学)

「海賊と日本人：社会というゲームのプレイヤー」

橋本博文

昨年の暮れに、『海賊の経済学—見えざるフックの秘密』(NTT出版)を手にとった。何気なく購入しておいた本だったが、これが本当に面白かった。海賊というふつう、荒くれ者で、残虐で、傍若無人に振る舞う連中・・・といった姿を思い浮かべるが、この本を読めば、海賊たちに関する一般的な常識は完膚なきまでに打ち破られ

る。(ちなみに、著者リーソン教授の年齢は30代前半。表紙を捲ると「アニア、愛してる。結婚してくれますか?」とあり(献辞でプロポーズをしている!))、ただ者でないことは明らかである。

リーソンによれば、海賊たちの社会においては、実は傍若無人というイメージとは正反対の絵に描いたような民主主義制が生み出されていたという。しかもそれは、欧米の社会において民主主義制が定着するより100年も前に、である。これは、先の海賊についての一般的な常識とはそぐわない。でも、リーソンはこの事実について、経済学的な観点から鮮やかに読者を納得させてみせる。海賊社会における民主主義制は、何も海賊たちの博愛主義によって支えられていたわけではない。海賊船上における船長の重要性を認めつつ、しかしその権力の濫用を抑制する必要があるという海賊社会を生きる人々にとっての適応課題によって生みだされていた、というわけである。加えてリーソンは、海賊たちにとっては、そもそもプリンシパル・エージェント問題が生まれる余地がない(基本的には、盗んだ船だから)という事実に着目し、海賊たちが外部の権威を借りることなしに自発的なかたちで民主主義制を作り出したのだと主張している。彼の主張を踏まえると、投票により船長や(船長の解任権を有する)クォーターマスターを選出するルールを、海賊たち自身が作り出したというちょっと信じがたい事実も頷ける。海賊たちは、自らの適応課題のために、海賊社会という「ゲーム」のルールを自分たちで作出し、自らの行動を縛りつけていた。そして、そうしたゲームを海賊たちがプレイする結果として、民主的な社会のしくみが維持されていた、というわけである。

ある社会を生きる人たちは、誰であろうと、自らの好みや欲望に身を任せ、好き勝手に振る舞うわけにはいかない。自分の行動に対してまわりの人たちがどう反応するかを予測しつつ、自分自身にとって望ましい帰結をもたらすよう行動する、いわば社会というゲームのプレイヤーである。この意味においては、海賊社会を生きだした人たちも、日本の社会を生きる私たちも同じはずである。では、日本の社会を生きる人たちがプレイしているゲームとはいかになるものだろう。また、そうしたゲームを

人々にプレイさせる誘因は何だろう。さらには、そうしたゲームのルールはいかに生み出され維持されているのだろう。これらの問いは、私自身が現在携わっている研究上の問いである。今のところ、これらの問いに対する明確な答えを出すには至っていないが、その答えを見つけようとする中で、いつも気に留めている点の一つがある。それは、ある特定の社会を生きる人たちの行動と、それを動かす心の性質(価値や選好、動機など)とを単純なかたちで結びつけてしまうことが、社会特定の心の性質や行動、あるいは心の性質や行動と社会との関係性を理解するうえでの足枷となり得る、という点である。海賊たちはそもそも粗野な犯罪者集団だったから、その中には残虐な心の持ち主が多くいたかもしれない。でも、海賊社会というゲームのプレイヤーである海賊たちは、海賊船の上では、嘘つきでもなければ、裏切り者でもなく、極めて正直で、争いを可能な限り避け、ルールを遵守し、互いに協力的であったという。このリーソンの議論は、個々人の心の性質とその本人による行動(そしてそうした行動の集積としての、マクロレベルとしての社会のしくみ)とが、単純なかたちで結びつかないどころか、ときには正反対になることだってある、ということを明確に示している。

今のところ私は、このような個々人の心の性質と行動、あるいは心の性質とマクロレベルとしての社会との間の「ずれ」に焦点を合わせることで、上述の問いに答える上での鍵となるはずだと考えている。海賊たちは荒くれ者、というイメージと同様に、日本人もまた協調的あるいは集団主義的であるとのイメージを持たれている。こうしたイメージの背後には、おそらく日本人の協調行動が本人の心の性質(つまり、協調的な価値観や選好)に支えられているという一般的な常識があるのだろうと思うが、(そして、文化を扱う心理学者の多くも、そうした常識にとらわれてしまっているように思うのだが)私自身が手にしている複数の知見を踏まえると、この常識も海賊に関する常識と同じように、議論の余地があるようである。日本人の協調行動に関する私の理解は、それらが個々人の価値観や選好によって生み出されているというわけではなく、人々が互いに協調行動を採用せざる

を得ない状態を作り出しあっているせいで生み出されている、というものである。この理解においては、リーソンの議論と同様、個々人の心の性質そのものが持ち出されることはない。つまり、人々が協調的な価値観や選好を有しているかどうかはともかく、まわりの人たちがそうした振る舞いに対して好ましい反応をすることの予測があることによって、人々は協調的に振る舞わざるを得なくなる、という観点からの理解である。そして、人々が互いに他者からの好ましい反応を得ようと協調行動を取り合うかたち

で、人々による予測と行動との再帰的な関係が生まれ、その結果としてお互いに協調行動を採用せざるを得なくなる状態が生み出されるとというのが日本人の協調性、協調行動に対する私の理解である。こうした「社会状態-行動-信念」間のマイクロ-マクロ関係について、もう少し踏み込んだ議論を展開することができないだろうかと日々考えているが、これについてはもうちょっと時間がかかりそうである。

今回、紙面上の企画にて、自分の研究を紹介させていただくチャンスを頂いた。心

より感謝申し上げたい。と、ここまで書いてから、企画のタイトルが『若手会員、声を上げる』というタイトルであることに気がついた。十分な「声」を上げたかと問われると、ちょっと自信はない。今展開している研究を少しでも面白いと思われるようなものにして、いつか声を大にして学会などでその成果を公表できるよう精進してまいりたい。

(はしもとひろふみ・北海道大学)

社会心理学を支えていただいている方々：その3

(株) 北大路書房

奥野浩之

小社には「書籍データ」と呼んでいる手作りのデータベースがあり、北大路書房の発刊書籍はもとより、制作中書籍、入稿待ち書籍、企画中書籍など、あらゆる段階の書籍情報を一元管理しています。この情報は常に全社員に開かれており、これを活用して、例えば出版企画の検討などを全社員で行っています。毎年2回作成する図書目録も、これを使えばボタン一つで原稿作成できるように仕組みられており、手前味噌ですが、ちょっとした“優れもの”です。

社会心理学というキーワードで検索すれば、関連書籍のリストが瞬時に作成できたりもします。学会員の皆さまにとっては少々退屈かもしれませんが、概ね発行順に関連書籍を書き出してみました。以下、おつきあい下さい。本当は書籍の著者情報まで載せたかったのですが、紙面の都合でカットしました。著者の皆さま、ご容赦を。

【社会心理学関連書籍リスト】

学級経営の心理学／現代社会心理学要説／人間関係論／小集団活動と人格変容／教師と生徒の人間関係／**学校教育の社会心理学**／しぐさの社会心理学／社会心理学用語辞典／**社会と文化の心理学**／説得と態度変容／わたしそしてわれわれ／教師が変われば子どもも変わる／**パーソン・ポジティヴィティの社会心理学**／人間関係の心理学ハンディブック／対人行動とパーソナリティ／心理学と人類学／人間関係のルールとスキル／しろうと理論／わたしそしてわれわれ Ver.2／自己意識と他者意識／社

会心理学／グループ・プロセス／被服と身体装飾の社会心理学(上・下巻)／集団凝集性の社会心理学／改訂新版 社会心理学用語辞典／態度変容理論における精査可能性モデルの検証／人間関係の心理と臨床／「愛」こころの動き／比較文化心理学(上・下巻)／社会的アイデンティティ理論／社会的状況とパーソナリティ／**被服と化粧の社会心理学**／集団を活かす／ソシオン理論のコア(シオンシリーズ 0 巻)／こころの国際化のために／**自己開示の心理学的研究**／**複合システム・ネットワーク論(シオンシリーズ 1 巻)**／リーダーシップ過程における性差発現機序に関する研究／**インターネットパーソナルコミュニケーション**／家族の感情心理学／5因子性格検査の理論と実際／「関係科学」への道(シオンシリーズ 2 巻)／スマートに生きる女性と心理学／平衡理論に関する研究とその展開／リーダーシップの統合理論／ナースをサポートする／すべては心の中に／偏見の社会心理学／**コミュニケーション心理学**／**被服行動の社会心理学(シリーズ 21 世紀の社会心理学 8)**／対人社会動機検出法／犯罪者プロファイリング／【教科書】社会心理学／**援助とサポートの社会心理学(シリーズ 4)**／消費行動の社会心理学(シリーズ 7)／交通行動の社会心理学(シリーズ 10)／説得におけるリアクタンス効果の研究／姿勢としぐさの心理学／**対人行動の社会心理学(シリーズ 1)**／**政治行動の社会心理学(シリーズ 6)**／**情報行動の社会心理学(シリーズ 5)**／コネクショニストモデルと心理学／文化と心理学／**組織行動の社会心理学(シリーズ 2)**／社

会的認知ハンドブック／**化粧行動の社会心理学(シリーズ 9)**／ナースのための臨床社会心理学／常識の社会心理／**臨床社会心理学の進歩**／心理学におけるフィールド研究の現場／**アナトミア社会心理学**／**個人主義と集団主義**／感情と心理学／心理学の哲学／**説得心理学ハンドブック**／日本における心理学の受容と展開／地理的プロファイリング／人についての思い込み I・II(心理学ジュニアライブラリ 05・06)／**女らしさ・男らしさ(心理学ジュニアライブラリ 07)**／犯罪に挑む心理学／ワークストレスの行動科学／未知なるものに揺れる心／エミネント・ホワイト／**グローバル化時代の社会心理学**／目撃証言の心理学／都市の防犯／エンサイクロペディア 心理学研究方法論／喪失体験とトラウマ／試験にでる心理学 社会心理学編／**若者の感性和リスク**／わたしそしてわれわれ ミレニアムバージョン／**インターネットにおける行動と心理**／捜査心理学／恋愛と結婚の燃えつきの心理／**パーソナルな関係の社会心理学**／攻撃の心理学／**外見とパワー**／「顔」研究の最前線／ケータイは世の中を変える／おしゃべりで世界が変わる／恥の発生／動機づけ研究の最前線／**文化行動の社会心理学(シリーズ 3)**／男と女の対人心理学／法と心理学のフロンティア (I・II 巻)／環境心理学(上・下)／そのひとことが言えたら…／学校心理学／クリティカルシンキング 研究論文篇／自己高揚過程における能力の自己査定に関する研究／**バイオレンス**／発言内容の欺瞞性認知を規定する諸要因／犯罪心理学／質的研究ハ

ンドブック(1~3巻)/非暴力で世界に関わる方法/非言語行動の心理学/観光の社会心理学/犯罪者プロファイリング入門/ソシオン理論入門/カトリーヌちゃんのサイコロ/ペットと生きる/説得に対する防御技法としての警告技法の開発に関する研究/環境のモデルロジー/対人関係と適応の心理学/ケータイのある風景/社会心理学概説/社会的動機づけの心理学/観光旅行の心理学/スポーツ社会心理学/人間関係のゲーミング・シミュレーション/あなたは当事者ではない/環境行動の社会心理学(シリーズ 11)/成人のアタッチメント/単純接触効果研究の最前線/エイジング心理学ハンドブック/自伝的記憶の心理学/愛着と愛着障害/葛藤と紛争の社会心理学(シリーズ 12)/対人関係のダークサイド/親密な関係のダークサイド/メタ認知/メタ記憶/心理学基礎実習マニュアル/名誉と暴力/増補改訂 試験にでる心理学社会心理学編/発達・社会からみる人間関係/仕事のスキル/自我体験と独我論的体験/質的研究用語事典/自己と対人関係の社会心理学(シリーズ 13)/自己意識的感情の心理学/愛の心理学/メタ認知 基礎と応用/社会と感情(現代の認知心理学 6)/性犯罪の行動科学/ミニマムエッセンス社会心理学/認知や行動に性差はあるのか/認知の個人差(現代の認知心理学 7)/実験心理学をリフォームする/よい教育とは何か(構造構成主義研究 5)/犯罪と市民の心理学/音楽アイデンティティ/パートナー暴力/ユーモア心理学ハンドブック/補完医療の光と影/愛とユーモアの社会運動論/仮想的有能感の心理学

2012年2月末現在、関連書籍は全部で●●冊。読むには少々退屈なリストにここで軽い「仕掛け」を施し、少しでも眺めていただけるようにしてみましょう。

<仕掛け1>: このリスト中、太字で示したものは、学会雑誌『社会心理学研究』の書評欄でご紹介いただいた書籍です。『学校教育の社会心理学』(小川一夫 編著、1985年)を古畑和孝先生にご紹介いただいて以来ほぼ30年、その書評数の多さに学会との深い関わりをあらためて感じます。書評をご執筆いただきました先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。また、大坊郁夫先生、深田博己先生らの書籍は複

数回、書評に取り上げられているのですが、お二人とも今年度、大学を退官されるとのこと、長い関わりをあらためて感じます。今後は、引き続きお世話になりますが、若い研究者との深い・長い関わりあひも、これからさらに求めていきたいと思います。

なお、これらの書評は、CiNiiで検索すると読むことができ、電子(ネット)対応の早さにも感心です。

<仕掛け2>: 学会賞をいただいた書籍があります。島田賞では『被服と化粧の社会心理学』(高木修 監修、大坊郁夫・神山進 編)と『アナトミア社会心理学』(吉森護 著)。『シリーズ21世紀の社会心理学』(全10巻)では特別賞をいただきました。感謝。これらは斜体文字で表してみました。

<仕掛け3>: 「翻訳書」は何冊くらいあるか…、このリストだけでは判別しにくいかと思いますが、この領野は、翻訳書が多いのが特徴の一つとなっています。最新刊は『補完医療の光と影: その科学的検証』(C. ヴィンセント・A. ファーナム/細江達郎 監訳)。また、協同で執筆された書籍の多さも、特徴の一つと言えるでしょう。

<仕掛け4>: 先に記した●●の所、誤植ではありません。後で数字を入れる予定でしたが、この原稿の締切が迫ってきました。数える時間がなくなったのでクイズにします。●●にあてはまる数字と共にお名前とご所属を明記の上、次のメールアドレスへお送り下さい。hensyu@kitaohji.com 正解者の先着50名様に、リスト中のお好きな1冊(品切本を除く)を選んで学会大会での小社展示ブースで交換できる「引換券」を贈呈します。ふるってご応募下さい。

<仕掛け5>: リストを眺めて、小社の書籍ラインナップにどういった特徴があるか…。社会心理学は重層的で幅広い研究テーマが特徴と言えますが、「まだ進化心理学関係の書籍が揃っておらずラインナップとして弱いところだ」などと小社でも分析したりしています。例えばそういったご意見・ご感想をお聞かせ下さい。今後の企画出版の参考になれば、先と同じ引換券をお送りしたいと思いますので、先と同アドレスにメールにてお寄せ下さい。なお、参考になるか否かについては、当方の「主観的判断」となりますのであしからず。

以上、全体的に「ゆる〜い」文章となっ

てしまいお恥ずかしい限りですが、学会員の皆さまとの交流をはかりながら小社を紹介する企図ですので、ご理解のほどを。

最後に、学会広報委員長の池田謙一先生をはじめ、学会員の皆さま、このような機会をあたえていただき、ありがとうございました。このコーナーの趣旨にそっているのか甚だ不安は残りますが、「締切日」までに脱稿することができて、安堵しております。なお、学会員の皆さまには小社から原稿執筆をお願いしている書籍が何本もありますので、“私のように” 締切厳守をお願いいたします(笑)。なにせ小社の「書籍データ」という手作りのデータベースは優れもので、ボタン一つで未入稿の著者を“割り出す”こともできるものですから。

(おくのひろゆき)

事務局から:

2012年度の年会費請求書を送付しております。学会活動は会費によって支えられておりますので、よろしくお願いたします。大学院生の方は学生証のコピー、PDFなどを事務局までお送りください。種別変更される方は金額を訂正してお振込みください。また、所属等の変更がありましたら、WEBの会員専用ページからの修正をよろしくお願いたします(2012年度、会員名簿の作成を予定しております)。

『社会心理学研究』掲載予定論文

■27巻3号(2012年3月刊行予定)

《資料》

○樋口 収・原島雅之「解釈レベルと達成目標が将来の予測に及ぼす影響」

《原著》

○相川 充・高本真寛・杉森伸吉・古屋 真「個人のチームワーク能力を測定する尺度の開発と妥当性の検討」

○小杉素子「情報の非対称を伴う二者関係での予期と行動の相互支持過程の検討」

○上原俊介・中川知宏・森 丈弓・清水かな子・大淵憲一「関係規範の違反に対するシグナルとしての怒り感情: 知覚された欲求責任違反の媒介的役割」

○小俣謙二「犯罪の予測可能性・対処可能性評価が大学生の犯罪リスク知覚と犯罪

不安に及ぼす影響」

会員異動

(2011年11月26日～2012年2月29日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員

佐藤 拓 (新潟リハビリテーション大学医療学部専任講師)

・大学院生

上田あすみ (神戸学院大学大学院人間文化学研究科)

■退会者

石川久美子、相馬幸恵、永井隆雄、松村麻美

・賛助会員

(株) R J C リサーチ

■所属変更

平井 啓 (大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室)、迫田裕子 (福岡教育大学研究補佐員)、清水裕士 (広島大学大学院総合科学研究科助教)、丹野宏昭 (東京福祉大学心理学部講師)、常岡充子 (科学警察研究所研究員)、本間元康 ((独) 国立精神・神経医療研究センター)、米田祐介 (関東学院大学経済学部非常勤講師)

編集後記

本号で特別なのは、なんとといっても、東日本大震災から1年を経ての寄稿4本です。ご寄稿いただいた会員の方々に深く感謝申し上げますとともに、広く会員の皆様に、またたまたまこの会報を目になさった非会員の方々にも、熟読していただけると、幸

いです。大震災から1年して、さまざまなレビュー、回顧があり、さらに体系立てて震災・震災後を検討し将来に向けて提言や改善を求める動きが急です。社会心理学会もその動きの上で、よい貢献をしたいものです。後記に関わらず冗談抜きの実感です(いけけん)。

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail : jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1件(1回あたり)1,000円
(後日事務局より請求書をお送りします。)